

沼津市 山 沼 水 記念館

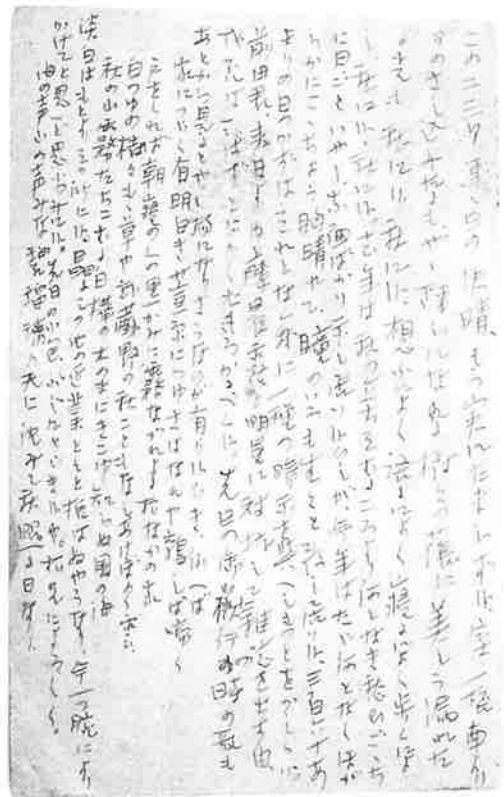
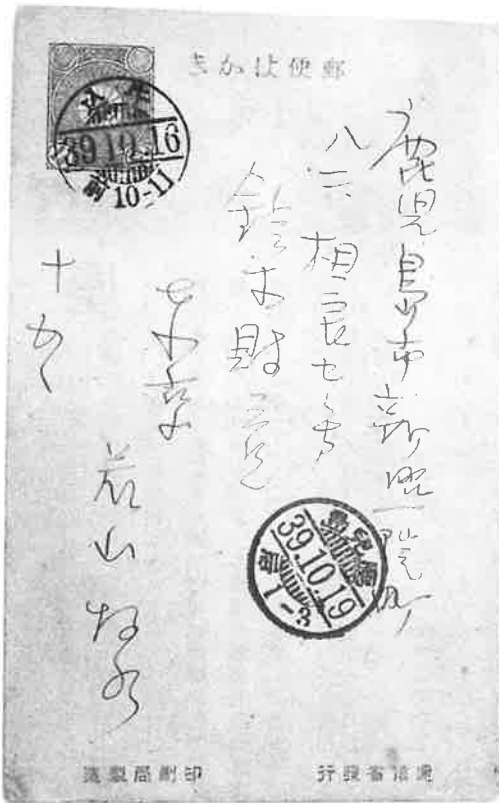
第二號

1989.7.31.発行

編集・発行 社団法人 沼津牧水会

〒410 沼津市千本郷林1907-11

Tel(0559)62-0424



牧水の葉書(1)

明治三十九年十月十五日、東京より、鹿児島市、鈴木財三宛、葉書 (竹沢正夫氏寄贈)

鈴木財三は牧水の延岡中学時代からの親友である。かつては短歌研究会「野虹会」でともに回覧雑誌を発行したこともあり、生涯を通して牧水の良き相談相手となった人物である。

この葉書を書いた明治三十九年の秋は牧水満二十才、大学英文科本科生で、同級の土岐湖友(のちの善鷹)や北原白秋とも親しかつた。歌もよく作つたが、歌ばかりでなく散文にも強い関心を示していたらしい。大学英文科の同級生たちと文芸グループ「北斗会」を構成していたが、そこには安成貞雄、佐藤緑葉、土岐湖友など秀れた仲間が集まっていた。この会は歌よりも小説の研究が目的であつたようだ。

牧水の歌の活動の場は師尾上柴舟を中心に、前田夕暮、三木露風らと組んで「車前草社」があつた。

これは当時盛況をきわめた与謝野鉄幹らの「明星」の浪漫主義に対抗して、雑誌「新声」を拠点に、自然主義的傾向に立つ集団として氣勢をあげていたようである。この葉書の中ほどに「前田君、来月より内藤晟露と明星に対抗して雑誌を出す由、成否は云はずとにかくおもしろかるべく候。」というくだりがある。友人の前田夕暮はすでに白日社を起こしており、雑誌「向日葵」を創刊しようとしていた。「白日社」も「向日葵」も「明星」に対抗する意識の表われであつて、このあたりに明治末期の歌壇に乗り出してきた牧水や夕暮など若い歌人たちの、性急で純真な熱気が感じられるのである。

(H)

特別寄稿

机上の塵

櫻井 淑

牧水先生の門弟として私達二人はまだ若かった。或る日、先生は彼と私を机の前に坐らせて、「机上を指でそつとなどで見なさい」と言はれた。二人とも素直になでた。今にしておもふと、二人とも素直といふよりは、何がはじまるかと言ふ「不安」の様なものがあったのはたしかである。勿論、目をとちてのこと。そしておそるおそる目を開いたと思ふ。先生は言ふ。「指先きに何かふれるものがあつたか」と。何もなかつたのである。

歌とはそう言ふものだ。塵ひとすぢでもふれるものがあつてはならぬ。と。勿論二人とも「わかりません」と、心の中で言ふより外なかつた。解るまで、解ろうとする、解ろうとしたその幾年月を今日もなほつづけているのである。彼は或る時、それについて、かう言ふのであつた。「切り捨て」と。可なり自信をもつたことらしかつた。私はまだまだであつた。有るはづのない「伝家の宝刀」をさがし求めて、若く、ロマンチックにすごしていたのであつた。「貴い思ひ出」は時に忘れはて、時にはととする程の迫力をもつて、迫つてもくるのである。今も。

幾年月を経て、二人は人生の大人になつていた。或る日、御前崎町の名苑「桜ヶ池」に歌の仲間と遊んだ。天城の「一碧湖」を小さくした様な幽粋な所である。湖畔に腰をおろして、いつしか二人は黙つてしまつていた。突然に彼は「塵」のことを思い出

したと、言ふ。私はすぐ解つた。私達はたしか、言葉すくなであつたと思ふ。以来又、幾年月をへて今は「すぐ解つた」ことの純粹なよろこびをかみしめるのである。

「机上の塵」の解決の或いは一齣かもしれぬ。そして「彼」すでに亡し。

先生は、半折を書かれる時、一枚や二枚でなく、一度に、何枚も書かれるのであつて、「墨すり」の役をおおせつかるのが私はうれしかつた。大きい硯。銘のある硯。それに、「青墨」の香り高いのをするのである。心引きしまる思ひで黙々と「すつた」思ひ出は私にとって生けるかぎりのものである。すつた墨汁は外の器になみなみとたたへる。

「墨」の清らかさを知つた事も、忘れ得ぬものである。先生は一生和服で通された方。半折を毛氈の上にはひろげて、じんじんばしやりをして、颯爽と立ち向ふといふていである。

「物も言はず」にである。

しかし、時として、その書きつつある「一首」を朗詠される。小声で。

歌の朗詠に「牧水流」などはない。この「小声」がいつしか弟子達の間に真似されていったのではあるまいか。誰言ふとなしに、「黒木伝松」といふお弟子さんの、真似が一ばん牧水に似ているといふことになつた。

黒木さんは愛弟子、九州の産で、鍛冶屋であつた。素朴な風格の人。一度だけ私は黒木さんの牧水直伝といふ朗詠をきいたことがあつた。似ているとは思はなかつた。しいて言へば静かなさびしさが味はへたので、似ていることになつたのかもしれない。

大悟法利雄さんや、弟の進さんが朗々とうたはれる牧水の歌の朗詠は、似ていようが、いまいがこの二人の牧水先生へ生涯の愛情と尊敬は、うたい上げられてあます所なく美事なのである。お二人の声をきく度に私は、半折に向つて筆をとりつつ、小声にうたはれた先生の、生な声の、さ





長湯して飽かぬこの湯のぬるき湯に
ひたりて安きこころなりけり 牧水

牧水が畑毛温泉に宿泊したのは大正十一年秋と翌年春の二回である。大正十一年九月に行つたときは中華亭(現在のいづみ荘)という旅館に三泊して、歌を二十七首作っている。この頃牧水は東京時代の疲労からようやく開放され、次第に元氣を取り戻していた。義弟長谷川銀作に任せてあつた雑誌「創作」の編集発行も、二か月前から沼津で自力で行うまでに漕ぎつけたし、以前から見れば見違えるほど活動的になつていた。畑毛温泉の小遊は正に忙中に得た僅かな閑日であるらしかつた。

畑毛温泉の歌碑

昭和六十三年十一月二十二日 除幕
静岡県田方郡函南町・畑毛温泉地内

函南町文化協会に所属する歴史研究会の人達が地の歴史を調べているうちに牧水来遊の事実を知り、早速町長に報告した。それからわかに歌碑建設の話が持ち上がったという。昭和六十三年に文化協会の事業として募金運動をはじめ、千三百名の会員から集めた浄財をもつて建設費用に当てたものだ。歌集「山桜の歌」の中の「畑毛温泉」という題の付いた二十七首の作品は、たまたま興に乗つて歌い上げられた、見事な国誉めの歌詠である。集中に例えば「つぎつぎに出でし欠伸びもいわずなりて心は澄みぬ夜半の湯槽に」という伸びやかな歌もあつて、歌人がこの温泉に惚れ込んでいた様子が見え、あざやかに歌われている。碑石は縦横一・五米程の修善寺町柿木産の自然石。筆跡は若山旅人氏のもの。碑は狩野川沿いのひなびた温泉町の一角、背景に富士山の見える広々とした場所に立っている。

びしさに似た永遠を感じるのである。
そんな先生は、太筆を振ひついたり人に意識していられたのであつたのではあるまいかと思ふこともしばしばであつた。
歌をつくる。歌を書く。歌を朗詠する。牧水先生の三様の姿を私は、「心の宝」として大切にしている。こんな宝は誰もが持つことを許されたいはず。とふと思ふ今日この頃であつて、思ひ出は、思ひ出を樂しむ者を向ふにまわして、三人目の私が樂しむ時、常に真新しいのであつて、るるとして書き綴りあかぬのである。

◎鉄びんのふちに枕しねむたげに徳利傾くいざ吾もねむ
◎再びはかく晴るる日もあるまじとをしみつつ日毎野にいづるかな
ヒヨウヒヨウと野をゆく後姿。
◎しみじみと今日降る雨はささらぎの春のはじめの雨にあらずや
「ささらぎ」でなければならぬ「二月」ではない。
◎いく山河こえさりゆめかばさびしさの果てなむ国ぞ今日も旅ゆく



明治三十三年生れ、若年にして若山牧水に師事今日に至る。
歌誌「声調」に所属、顧問。
学歴、受賞歴なし。

富士の裾野にあつた巨岩。国鉄のお世話になり、又多ぜいの人の力を借りて、沼津の町の中を、「ころ」で引いて来て浜に据えた日の思い出は遠くなりつつある。知る人や誰。知る人や今いくたり。
終り

新しい資料の公開・書簡

大正三年十月二十九日小石川區大塚窪町二十よ
り、信州東筑摩郡坂北村、小河原寛香様

(手紙・田中旭氏寄贈)

君の昨日の葉書は、まるで後期印象派の画のやうであつた、しかも寧ろ凄^すごかつた。

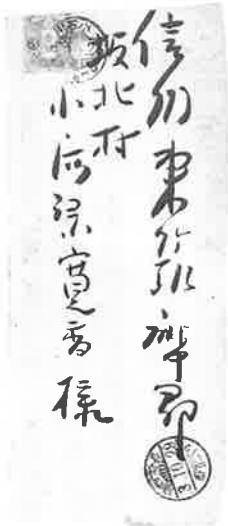
さうした君の情態を想像すべく僕はいま最も適當した位置にあるものかも知れぬ、ぴちぴちと身にこたへる。

他のことはとにかく結婚問題に対しては、極力自己を主張してほしいと思ふ、ずるずるべつたりは相互の不幸である、罪悪かも知れぬ、ひとのことではなく自己のしかも一生の問題ではないか、此際のご・も・な・れ・的・態・度・は、さすがの僕も敢えて反対せなくてはならぬことである。

行きたいには非常に行きたいが三週間ばかり前から例のいつか君をおびやかした×××××氏が僕の門戸を敲いてゐるのだ、氏を送り出さぬ以上、一寸そこまでの汽車乗は考へものだ、それに折角逢つてもゆつくりと飲めまいかと恐れてゐる、毎年のごとで一向気にもしなかつたが今年のは、どうしたのか可なり癡悪でさすがの小生も少々恐怖不安を感じてきて、数日前から服薬中、昨日から禁酒を思ひ立つた、あと十日もおればなるにきまつてゐる、もしたらどうかして逃げだします。

なんなら君出て来ない、もつとも同じく右位ゐる日をたててからの方がいい、何となれば、ゆつくり飲みたいから。

君の冷静な透徹した態度を祈つて、とり急ぎ御返



事に代へる。

二十八日、 牧水

素山兄

大正十二年十二月三十日、沼津市上香貫より、
東京、前田孝愛様 (手紙・竹沢正夫氏寄贈)

お手紙うれしく拝見、お為事が出来て結構です。ことにその絵の買手が八木君だときいて、ほんとうに難有いとおもひました。

社費のことは気にかけないで下さい、社費々々云つてるのは、タチの悪い奴を相手に云つてることなのです。

それから一つこのさいふんばつして出かけて来ませんか、明后日小生は土肥にゆきます、君も行きませう。沼津の川口から午前五、六時と十一時(十二時)と午後三時の三回汽船が出ます、汽船二時間、それにすぐ乗つてもいいし、若し風で船が出なかつたら小生宅に来て出るまでお待ち下さい。

とにかく出ておいで下さい。滞在費と帰りの旅費は小生が持ちます、オコラズに下さい、今のところ、君より僕の方が金持だらうと信ずるから斯うなります、温泉に入りながら語りませう。

では、待つてます。

十二月三十日 牧水

前田孝愛兄

沼津市若山牧水記念館・特別講座

第三土曜日の読書会

玉城徹先生と本を読む

この読書会を始めるに当たり、先生はまずこう言われました。「知識を先立てたくない」「知識の切り売りはしない」「とにかく作品にじかに触れる、知識になるのは、それからである」

こうして開かれた本を読む集いは、北村透谷や島崎藤村の詩を朗読される先生の声音を聴くことから入りました。当時の日本における詩の言語を情熱的に開発した透谷、その透谷につよく影響を受け、やがて「若菜集」に至つた藤村。近代誌の黎明期を説き明かす先生の分かり易い談話は、参加者を完全に堪能させたのであります。



東京大学文学部卒。著書「近代歌人の思想」「芭蕉の狂」など多数。現在、毎日新聞「毎日歌壇」選者。

この講座は牧水記念館会議室において引き続き次のようなテーマを中心に催されます。参加費は一回千円。(但し牧水会会員は無料)

友達と誘い合わせて気軽にご参加下さい。

- 第三回 8月19日 『白秋と茂吉の散文』
- 第四回 9月23日 『手紙幾つか』
- 第五回 10月21日 『森鷗外と明星派』
- 第六回 11月18日 『万葉集と近代短歌』

(前回掲載の「牧水の日記」はその後の調べで、牧水全集巻十一に収録されていることが分かりました。謹んで訂正申し上げます。)